

式辞

皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日、この歴史ある武蔵学園大講堂で式典に参加していらっしゃる学生の皆さん、ご父母の皆様、関係者の方々にも、心からおめでとうと申し上げます。

この大講堂は、日本最初の私立七年初級学校である旧制武蔵高等学校の一期生の卒業式に向けて、一九二八年、昭和三年に建設されました。今年で築九六年になります。設計は日比谷公会堂などを手がけた、当時を代表する建築家である佐藤巧一によるもので、練馬区に現存する最も古い鉄筋コンクリートの建造物である大学三号館とともに、練馬区登録文化財に指定されています。

私たちは、二〇二〇年に始まった新型コロナウイルス感染症の拡大によって、大きな影響を受けましたが、特に、このたび卒業式を迎えた多くの皆さんの場合、入学式を迎える直前に感染症が拡大し始め、この大講堂で行う予定であった入学式は中止になり、オンラインでの動画配信もできませんでした。授業の開始も5月になり、やっと始まった授業もオンラインという状況でした。

入学したのに大学のキャンパスに来られない、対面で友人に会えない、課外活動が思うようにできない、授業のために終日パソコンに向かい合う、そもそも教える側も教わる側も初めてのことで戸惑いが多い中で、大学生活をスタートした人もほとんどであったと思います。

この卒業式も、三年前はオンライン、二年前は大講堂で実施しましたが、ご父母の皆様を大講堂にお招きすることはできず、昨年からようやく今のようなかたちに戻りました。

そのことを考えますと、この度、池田学園長、矢田大学同窓会会長、そして父母の会の五十嵐会長、町田副会長にもご臨席いただき、こうして皆さんと対面で、共に卒業式、大学院学位授与式を挙行できますことは、教職員一同にとっても望外の喜びです。

さて、今年、大学院を修了される方は、経済学研究科、博士後期課程一名、博士前期課程五名、人文科学研究科、博士前期課程八名です。また、学部卒業生は、経済学部三八五名、人文学部二五九名、社会学部二三〇名で、合わせて八七四名です。

石原雅行(いしはら まさゆき)さん、博士号の取得おめでとうございます。石原さんは、「二つの新しい視点からの検証」という題名で、「LIFE」の実証研究に関する博士論文を執筆され、その緻密な研究と独自性が認められて博士号を授与されました。

修士号を授与された方々は大学院で学んだ専門知識を活かして、新しい世界でご活躍されることを心よりお祈り申し上げます。

また、これ以降は、この式辞は、学部卒業生の皆さんを対象としてお話させていただきますが、大学院修了生の皆さんは自らの立場に置き換えて、お聞きくださるようお願い申し上げます。

武蔵学園は、皆さんが在学中の二〇二二年度に創立百周年を迎えました。この節目となる年を経て、卒業される皆さんの多くは企業に勤め始めると思いますが、そのほかにも、大学院や専門学校で新たな学びを始める人、またこれからの進路を改めて考え始める人もいらっしゃるかもしれません。どのような道を歩み始めても、皆様方は「武蔵大学の同窓生」です。武蔵大学卒業の第七二回生として、学友との友情の絆をこれからも大切にしていってください。

さて、武蔵大学の前身である旧制武蔵高等学校には建学の三理想という教育方針がありますが、皆さんが卒業するにあたって、この建学の三理想について改めてお話ししたいと思います。

第一は「東西文化融合のわが民族理想を遂行し得べき人物」を育てることです。

東西文化融合は、古くは、ひらがなやかたかなの誕生もそうですが、明治維新後、私たちは西洋からさまざまなことを学びながら、日本独自の文化や技術を作り出してきました。

固有の文化や技術を新しい文化や技術に融合する能力は、明治時代に日本を訪れた多くの外国人が認めるものでした。この東西文化の融合は、平安時代や江戸時代など海外からの影響を長く受けなかった時代があった日本だからこそ実現できたものが数多くあると思います。グローバル化はある意味、世界を一つの基準で動かしてしまう、一つの商品ですませてしまおうとする恐ろしい力を持つものです。しかし、その中にあっても、日本古来の文化や伝統をどうすれば維持できるのかを考えながら、急ピッチで進むグローバル化社会を生き抜いてほしいと願っています。

第二は、「世界に雄飛するに耐える人物」を育成することです。

世界に雄飛するのは、身体、体だけではありません。精神や心も雄飛します。日本は食料の6割以上を輸入に頼っているわけですから、毎日の食卓からも世界に思いをはせることができます。皆さんが入学された時の学長である山崎先生が「Think Globally Act Locally」とよく話されていますが、日本にいなながら世界の中で生きていくという考えには私も強く共感しています。

第三は、「自ら調べ自ら考える力ある人物」を育てることです。

自ら調べ自ら考えるは、正解は他者から与えられるのではなく、答えは自分で導き出さなくてはいけない、そのためにどのような力が求められるのかを表したものと考えられます。

世界の国々の中で新たな秩序が模索され始め、人工知能に代表されるような新しい技術がより身近なものになっていく中で、初めから正解があるような問いは益々少なくなるでしょう。

正解がわからない場面に遭遇した時、皆さんはどのような行動を取るでしょうか。ひとつの選択肢は、行動を起こさないというものですが、時にはそれが許されないこともあります。その時は、やはり自ら調べ、そして自ら考えることしかありません。

そして、未知の取組みにはどうしても失敗がつきものです。しかし、失敗は成功の反対にあるものではないかもしれません。失敗はもっと成功に近いところにあるもので、成功の正反対にあることは、「何もしないこと」ではないでしょうか。

これから、自ら調べ、自ら考えて、ぜひ、未知の世界にも挑戦し続けてください。

卒業式が終わると、皆さんは大学での知の世界の旅を終えて、新しい一步を踏み出すこととなります。しかし、大学を卒業しても知の世界の旅は終わりません。むしろ、これからは大学生生活の何倍もの時間をかけて、それぞれの知の世界を歩き続けることとなりますが、その前に私からお伝えしたいことがあります。

ひとつは、より高度な「知の世界」が、皆さんを待っていることです。知の世界には状況や文脈に依存しないものと依存するものがあります。状況や文脈に依存しないものとは、例えば熱量とは何か、それはどのように計算されるのか、もしくは数学の定理や物理の法則などといった誰がいつ問いかけても答えは同じものに相当します。一方、状況や文脈によって答えが変わる知とは、この特定の企業の経営を、今、立て直すためにはどうすれば良いのか、東京都全体でもない、その中の練馬区でもない、「この」地域の課題を解決するためにはどうすれば良いのかといった、対象や場所、そしてタイミングが異なると、同じ問いでも答えが変わるものです。

一回限りで賞味期限を過ぎてしまうようなものですが、社会に出るとそのような問いかけが皆さんを待っています。絶えず動いていて、その都度、状況や文脈が変わる中で最善の判断を行い、行動を起こす能力です。それは、経験の反復を積み上げながら、こういう状況ではこれであると判断できる能力とも言えます。古代ギリシャの哲学者であるアリストテレスは、このような実践的な知に加えて、そこに高度な倫理観が加わった知を「フロネシス」と呼びました。皆さんには、ぜひ倫理観が備わった実践的な知を蓄えていただきたいと願っています。

もう一つは、「知の世界」の旅は一生終わることがないということです。本学の第四代人文学長を務めた伊能敬(いのう たかし)先生の直系の祖先でもある伊能忠敬(いのう ただたか)が中心となって、江戸時代後期に日本全土の実測地図は作成されました。その伊能忠敬が測量技術を本格的に学び始めたのは、家督を長男に譲った五十歳の時、初めての測量のために蝦夷地に旅立ったのは五五歳の時とされています。多くの人が五十代で亡くなった時代であることを考えると、今の感覚では、七十歳くらいから新たな学びを始めたようなものと考えられます。

皆さまから見て、右の壁面、そして左の壁面にかけて、旧制高校の歴代校長、大学開学後の歴代学園長の肖像画が飾られています。その右前方を見ていただくと、一番奥に初代校長一木喜徳郎(いっき・きとくろう)の肖像画がありますが、その隣、その手前にある肖像画は第二代校長である山川健次郎のものです。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、山川健次郎は、福島の会津藩士の三男として生まれ、幕末から明治初年に起きた会津戦争の時には十代の少年として戦火の中を生き抜きました。その後海外留学を経て、学問の世界に入り、東京帝国大学や京都帝国大学の総長を経て、旧制武蔵高等学校の第二代校長に就任されましたが、その時、山川健次郎はすでに七〇歳を超えておりました。

大学を卒業したからといって、「知の世界」との縁がなくなることはありません。社会人になった後は、大学時代とは異なる学びの形を自分なりに作り上げてください。

最後に、私も四十年以上も前になりますが、多くの皆さんと同じように大学を卒業してすぐに企業に就職し、しばらく働いていた経験があります。そこで私が学んだことの一つは、組織にしても地域にしてもそこに求められる全体の仕事は四角いかたちをしているということです。

その一方で、地域の人や組織に働いている人に本来、もしくは最低限、割り当てられている義務や仕事の形は丸です。想像していただくとうるまじいように丸で四角は埋められません。すき間が必ず残ります。このすき間は誰かが埋めなければ地域にしても組織にしても正常に機能しません。私は、皆さんには、丸で埋められない役割や仕事を率先して行う社会人になってほしいと思います。

それは、もしかしたら損得勘定抜きで他者に尽くすことになるかもしれませんが、人は自分のために頑張ることには限界がありますが、他者のためであればその限界を乗り越えることができます。武蔵学園は、創立者である根津嘉一郎のそのような精神が出发点になっていることまでぜひ思い出してください。

倫理観が備わった実践的な知を蓄え、いつまでも知の探究を続け、組織や地域の中で丸いままだとどまらないことを忘れずに、この変化の激しい社会を生き抜いて下さい。

皆さん、ご卒業おめでとうございます。これからも武蔵のことを思い出したら、いつでもキャンパスを訪ねて下さい。

以上をもって私からの卒業生へのメッセージといたします。

令和六年三月二十二日

武蔵大学長 高橋徳行